「おふでさき」第一号：第十二首～第十四首

おやさと研究所嘱託研究員
深谷　耕治　*Koji Fukaya*

「おふでさき」第一号の第十二首から第十四首は、

いちれつに神の心がいづむなら
ものゝりうけかみないつむなり　十二
りうけいのいつむ心ハきのとくや
いづまんよふとはやくいさめよ　十三
りうけいがいさみでるよとをもうなら
かぐらつとめやてをとりをせよ　十四

語句の意味を確認しよう。「いづむ」とは大和の方言で、「いじける」「萎縮する」という意味で、文脈によっては「差し控える」という意味にも用いられる。さらに長野県のある地方では「ねたむ」「ひがむ」という意味でも使用されるらしい。「りうけ」は「リュウケ」と読んで漢字では「立毛」と書き、「農作物」を意味する。したがって、この３首を端的に訳せば「何事につけて神の心に元気がなくなれば、農作物もみんな元気がなくなる。農作物が不作になるような心は気の毒だから、そうならないように早く勇んでほしい。農作物が元気になることを願うならば、『かぐらづとめ』や『てをどり』をせよ」となる。

前回「かぐら」について述べたように、一般に行われている「かぐら」の中には稲作の予祝をテーマにしたものもあり、その年の豊作を神に祈願する儀式は一般的に行われていた。そのため、「おふでさき」第一号が執筆された明治２年当時の人々（主に農家）にとっては、この歌は自分たちの生活に密接に関わるものであり、自分たちの本業において何をすべきかを明確に読み取ることができたであろう。

ところが、我が国では時代を経るにしたがって農業に従事する人々は減少し、農業用語はなじみが薄くなってきているといえる。例えば、総務省の統計によれば1950年の農林水産業の従事者は15歳以上の就業者数の48.6％であったのに対して、2005年では4.9％と激減している。そのため、我々の多くは「豊作」や「不作」と聞いてもそれが生活実感と結び付きにくく、ときには少し角度を変えて「おふでさき」を読んでみたり、何らかの補助線を引いて歌の意味を考えてみることも必要になってくる。そこで、ここでは上記の３首を読む上で『月と農業』という本を経由してみたい。著者はハイロ・レストレポ・リベラというコロンビアの環境学や農学の専門家である。

本書では、月齢が植物に及ぼす影響について述べている。月齢とは月の満月までの連続した移り変わりのことで、太陰周期とも呼ばれる。それは月と太陽の周期の関係を示したもので、月の周期の長さはおよそ29日と12時間44分2.8秒とされている。月の引力が海水面の潮の満ち引きに影響を与えていることはよく知られているが、その影響は植物の樹液の流れにも及んでいる。

月の周期には「新月」からはじまる次の８段階がある。まず、「新月」とは月が地球と太陽のあいだに入ったときで、地球からは月が見えない月齢である。新月から３日ほど経つと「三日月」になり、西の空に「C」の字を反転させたような形で月の輝きが見える。それから３、４日経つと「上弦の月」と呼ばれ、地球から月の半分が照らし出されて見える。それからさらに３、４日経つと「十三夜」と呼ばれ、月面のほとんどが照らし出される。そして新月からおよそ15日経った頃に「満月」となる。「満月」とは地球が月と太陽の間にある時期で、その明かりは三日月の約12倍も明るい。それから月面が徐々に欠け始めて「十八夜」となり、さらに上弦の月と反対側の半分が輝く「下弦の月」になり、やがて「C」の文字のように欠けて「二十六夜」になる。二十六夜は次の新月に入る直前であり、また新しい月齢が始まる。

『月と農業』によれば、このような月齢が植物内の樹液の流れに深く影響を与えている。まず、「新月」では植物内の樹液の流れは下降して根の部分に集中する。それから「上弦の月」になると樹液の流れは上昇し始めて幹の部分に集まる。そして、「満月」には樹液は幹からさらに上昇して樹冠内の葉・花・果実の部分に集中する。それから「下弦の月」になると樹液は再び下降して幹部や根部に流れていく。つまり、「新月」→「上弦の月」→「満月」→「下弦の月」という各ステージにおいて植物の水分がそれぞれ「根元」→「幹を上昇」→「葉･花･果実」→「幹を下降」と循環していくのである。

このような月齢と樹液の関係を考慮すると、野菜の収穫時期にはその種類に応じて望ましい時期があることが分かる。例えば、トマトやキュウリなどの生鮮果菜類は上部へ水分が集中する「満月」の時期。ニンジンやジャガイモなどの根菜類の場合は水分が下部へ拡散する「新月」の時期。また新緑で柔らかい葉を収穫するには「三日月」から「満月」の間となる。さらに、収穫の時期だけでなく種蒔や移植の時期、あるいは育てる作物の種類によって適した月齢の時期がある。また、月が植物に与える影響はそのような引力だけではなく月光の働きによるところも大きい。太陽の光子は強すぎて植物が生長するのに必要な養分吸収を阻害するといわれているが、月の柔らかい光は地中に深く射し込み、土中に残った月の光子が植物の種子を病気に強く丈夫に育つように導くことが報告されている。

このように『月と農業』では月の農業に対する影響が説明されて、「月」と「植物」と「人」が一つの大きな有機的な環を形作っているという知見が示されており、さらに、人の営みとしての農業がそのような「月－植物－人」という環のなかで行われたときに人は「旬の味」を味わうことができることを示している。それが“望ましい”時期ということの意味だ。

ところで、「おふでさき」の上記の三首では、その環の中に「かぐらづとめ」や「てをどり」という農業とは別種の営みが提示されている。つまり、「農業」は「月－植物－人」の環で行われるのに対して、「かぐら」や「てをどり」という人の営みは、新たに「神の心がいさむ／いづむ」という要素を加えて、「月－植物－人（の心）－神の心」という環で行われる。いや、“新たに”という表現は適切ではないだろう。なぜなら明治２年当時の人々にとって神への豊作の祈りは“新しい”ことではないのだから。つまり、明治２年当時に農業に従事していた人たちは、『月と農業』をことさら読む必要もなく、体験として「月－植物－人」の環の中で生きており、その環に「神の心」を足すこともごく自然であったといえる。そもそも当時の人々は明治６年までは太陰暦で暮らしており、生活実感として太陽暦が定着するのはもう少し後であったろう。このことは以前記した時間意識の違いにも関連する。このように考えると、たとえ我々の多くが農業という営みになじみが薄くなってきたとしても、「月－植物－人（の心）－神の心」という環を意識して「おふでさき」を読む態度が重要であるといえる。